

2021. 7. 4. 主日礼拝説教
聖書：マタイによる福音書 11章 25-30 節
『重荷を軽くするために』

主イエスの語られる言葉は多く譬話で記されます。当時の人々の生活に密着したよく知られている題材を選んで、それを例に取り上げて説教されています。百匹の羊の譬えは羊飼いの生活の中から、種まきの譬えは農夫の生活の中からという具合にです。その中に頸木(くびき)を例にする箇所があります。この頸木というものは現代のわたしたちの生活の中ではもはや見かけられなくなったものですが、耕耘機などが普及する前は頸木を使って田畑を耕すのが一般に知られていた方法でした。新約聖書の時代のイスラエルでも頸木はよく知られていた農具の一つでした。頸木の形として最もポピュラーなのが、一本の棒に一对の輪をつけて、その輪を牛やろばなどの家畜の首にかけ、その棒の真ん中に引き棒を繋げて鋤や車などを引っ張らせていたようです。このような頸木では一頭の家畜だけでは用をたすわけにいかず、かならず二頭の家畜が必要であったわけです。旧約聖書の中にも、この頸木を譬えに使った言葉が用いられている箇所が以外にたくさんあります。たとえば、エレミヤ書 28 章 14 節「わたしは、これらの国すべての首に鉄の頸木をはめて、バビロンの王ネブカドネツアルに仕えさせる。」等の使われ方があります。これは、他国に支配され奴隷状態に置かれたイスラエルの民の苦境を頸木という言葉で表現しているのです。しかし、かならずしもこのような悪いイメージばかりではありません。次のような用いられ方もあります。エレミヤ書 2 章 20 節「あなたは久しい昔に頸木を折り、手綱を振り切って『わたしは仕えることはしない』と言った」ここでは「頸木を折る」という表現で、神の言葉に背いて偶像崇拜に走ったイスラエルの民の背信が描かれています。ここでいう頸木とは、神の言葉に忠実に従う人の信仰をイメージしているのです。

本日の聖書の箇所で、主イエスは次の様に語ります。「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」と。

ここで強調されるのは主イエスの頸木は決して重いものではなく、軽いといわれることなのです。頸木は一頭の家畜が負うものではなく、二頭の家畜が追うものであるように、人が自分一人で何もかも背負い込むのではなく、二人以上の人が一つの荷を担い、頸木を共に負うことこそ、荷を軽くすることになるのです。教会の歩みも、牧師だけで、あるいは役員だけで担い切れるものではありません。皆が一つの頸木を負うことでお互いの荷を軽くし合い、良い働きが出来るのです。しかも、力のある者、才能のある者が一人で何でもしてしまうよりも、一つの頸木を負って、ゆっくりでもお互いが歩調を合わせて働くことの方がその結果として得る喜びは大きいのです。

主イエスは「わたしの頸木を負え」と勧められます。それは主イエスが頸木の片棒を負っておられるということなのです。わたしたちの弱さを理解して下さる方が、わたしたちと歩調を合わせて、いっしょに歩み、働いて下さる……。どんな重荷もこの主イエスと担うとき、それはかならず軽くされるのです。